史遊会通信

NO.208
平成24年
4月16日
発行

事務局
☎
03--3712
0651
下山田方

三月講演後記

韓国歴史ドラマに遊ぶ

隆　恵

名作「冬のソナタ」の韓国ドラマの放映を契機に、わが国のオバ様に韓流ドラマブームが起き、撮影舞台の韓国詣が盛んになった。韓流ドラマは、イケメンの男優が登場する現代劇ドラマが注目されてきたが、近年は「チャングムの誓い」「イサン」「トンイ」に代表される歴史ドラマが沢山放映され、我々中高年のオジさんがこれに嵌っている。この歴史ドラマも現代ドラマに劣らず、中国・香港・台湾・タイ・等々東アジア全域で好評を得ていると聞く。

そこで、三月の講演では数多くの歴史ドラマの舞台となっている李氏朝鮮王朝について述べたのだが、中途半端で終わったので、本稿では主として講演後記を述べる。

李氏朝鮮王朝は、一三九二年の建国来一九一〇年の日韓併合までの約五百年間の長期王朝である。李氏朝鮮が五百年も永続できた要因は、前王朝高麗の混乱を他山の石としたからであった。

即ち高麗王朝では、土地と民を大豪族たちが私有化していたため王の基盤が極めて脆弱であった。このため九三八年の建国来、王は傀儡化され、大豪族たちによる「武人政権」が長く続いた挙句、その後はモンゴルの元による属州化が約百年も続き、独立国としての

例会のお知らせ

◎ 4月例会

日時　平成24年4月25日（水）
　　午後6時～8時
会場　目黒区民センター　7階
　　社会教育館　第2研修室
講演　鍋屋次郎氏
テーマ　キリシタン大名
　　「有馬一族」
自由執筆　三戸岡道夫・鯨游海・
　　新井宏の諸氏
締切　4月末日

◎ 5月例会

日時　平成24年5月23日（水）
　　午後6時～8時
会場　目黒区民センター　7階
　　社会教育館　第2研修室
講演　森下征二氏
テーマ　未定
自由執筆　小田紘一郎・中込勝則・
　　千坂精一の諸氏
締切　5月末日

体裁までも失ってしまう。

そこで、開祖の李成桂・第三代太宗・第四代世宗の延べ約六十年をかけて、中央集権制（土地と兵員の国王集中化）と文官による統治・崇儒排仏即ち朱子学を国教とする政治制度と社会全体の規範化・厳格な身分制度を実現する。対外政策は、隣国の強国明への恭順（冊封制度）を国是とし、一方朝鮮民族の永年の仇敵である北憂の女真人（後に清を建国）への敵愾心と蔑視、且つ前王朝時代からの南患であった倭寇の駆逐と日本に対する対等意識であった。そこで、この王朝を理解するために、この特徴を少し述べる。

① 朱子学を国教とした政治制度と社会の規範化

三国時代から前王朝高麗までの約一千年に及ぶ永年の仏教崇拝から儒教崇拝に大転換する。その基本は朱子学の「理」（正義か不正義か）を価値基準とし、王を頂点とする身分の上位者・先祖・祖父母・両親・年長者への孝養、また葬式等の儀式の細則が実践される。

一方、前王朝時代に政治権力化した寺院と僧侶の徹底した弾圧を行い、寺院の破壊と僧侶の身分を賤民に格下げする。この結果、今日の韓国の市内には由緒ある寺院はなく、仏教文化の一つである緑茶を飲む習慣も消えてしまった。

② 王を頂点とした中央集権制度と文官優位制度

この制度は中国を見習った科挙（儒学のテスト）で合格した両班（ヤンバン）が全ての政治権力を握り、王の決済で執行される制度である。本制度は、日本の平安時代の政治制度に酷似しており、王（天皇）を頂点として領議政（太政大臣）以下の両班（殿上人）が政治を行う制度である。中国を発祥地とする両班の元々の言われは、王の列席した重臣会議で二列に重臣が居並ぶ訳だが、王は南面に向かって座り、東班（列）に文官、西班（列）に武官が居並んだ事にある。しかし、この王朝では文官が主要ポストを掌握し、軍を統率する兵事判書（国防大臣）も文官が就任、武官は各地に点在する部隊の指揮官となるが、軍兵の私兵化を防ぐために転属を定期的に行う。

一方、建国初期に多発した王族同士の血生臭い王位争いを避けるため、王以外の王族は無位無官の微禄の境遇に置く。この結果、王位のポストと朝廷の主導権掌握は一族の死活問題となり、王族と両班の合従連衡による権力闘争は、極めて陰湿な権謀術策の応酬が常に起きる事となる。この闘争に負ける事は、単に甘い汁が吸えないと言うだけでなく、暗殺されたり流刑や死罪、もしくは奴婢にされられるなど、極めて悲惨な結果を齎した。そこには、日本の「敗者への労わり」など全くない凄惨な権力闘争であった。

③ 中国を主と崇める事大主義

朝鮮半島は古来より中国の冊封制度下にあったが、十六世紀末の倭乱（文禄・慶長の役）の撃退に多大な貢献をしてくれた明への恩義を重んじ、新興勢力の女真人の後金との戦い（胡乱）を挑み大敗、「三田渡（サンデント）の盟約」で極めて屈辱的な隷属を約束させられる。この戦後の賠償は甚だ厳しく、五十万人の民が捕虜として連行され、その後の歴代王は清の使節団を宮廷外の迎恩門に出迎えて「三跪九叩頭」（地面に膝まずき、地面に頭を叩きつける事を九回行う）を義務付けられ、王の交代は勿論王妃や世子（皇太子）の冊立にも清の皇帝の宣旨をもらう必要があった。この結果、益々事大主義（慕華思想）を外交の基本政策としたので、十九世紀後半からの欧米列強や明治政府に対して頑迷な排除政策を行い、清国同様の末路を迎える。

④ 厳格な身分制度

一般的に両班（貴族階級）・中人（下級役人）・常民（商人、農民）・賤民（僧侶、医者、妓生、奴婢、白丁）に四分割され、当初は厳格な分離政策が行われるが、時の経過とともに身分を金で買えるようになる。特に美貌や芸能に秀でている妓生の中には、王や両班の側室に出世する者も出て、歴史ドラマの格好な材料となっている。

（イ）三人の「君」名の王たち

二十七人の王が在位し諡号の大半は「宗」号だが、特別功績のあった王には「祖」号が送られたとされている。この「祖」号の王は、初代の太祖、第七代世祖、第十四代宣祖、第十六代仁祖、第二十一代英祖、第二十二代正祖（イ・サン）、第二十三代純祖である。この中には後世の直系子孫である王たちによる恣意的な贈号があるので、開祖の太祖と曲がりなりにも国難を救った宣祖（倭乱）と仁祖（胡乱）、これに加えて開明君主の誉れの高い正祖の四人であろう。今の韓国で英雄とされる第四代の世宗は、並みの「宗」号であり、王朝時代はその評価は高くなかった。しかし、民族の象徴とも言える固有文字のハングル文字の開発を行ったという事で、独立後の二十世紀になって世宗大王の呼称で最高の評価を得て今日に至る。

王であったにも拘らず、諡号なしの単なる王子の呼称である「君」名の王が二名いる。その二名とは燕山君と光海君で、何れも悪逆非道の暴君であり、廃位されたとなっている。実は、もう一人隠された「君」の王がおり、それは魯山君（端宗）である。

▲魯山君（一四五二年～一四五五年）

世宗の嫡孫故に僅か十一才で第六代王となるが、叔父である世宗の次男（後の世祖）により僅か四年で王位を簒奪され、挙句の果てに毒殺される悲劇の王である。毒殺後の墓所も分からないまま約二百五十年間も放置されていたが、現在放映中のドラマ「トンイ」を側室にする第十七代粛宗がこの王を悼み「端宗」号を送り、丁重に墓地に埋葬する。六年前の韓国でこの端宗の供養が盛大に催されたそうである。

▲燕山君（一四九四年～一五〇六年）

第七代世祖の嫡孫である第九代成宗の庶子で、真の権力者であった仁粋大王大妃（成宗の実母、燕山君の祖母）に嫌われた実母は殺され、更には自分が寵愛する側室の張緑水も殺される。彼は、結局党派間の闘争に巻き込まれて王位を追放され、その数か月後には病死したとされる。死因については疑義のあるところである。この張緑水は、後述する三大悪女の一人としてドラマによく登場し、現在彼女を主人公にしたドラマが放映されている。

▲光海君（一六〇八年～一六二三年）

父の第十四代宣祖に従い倭乱では国難に対処し、即位後は荒廃した国土の再建に尽力する。その倭乱の約二十年後に北辺の後金（後の清）が勃興、この後金と一戦交えるが敗戦する。その後の一六三六年に先に取り交わした和議の条件である「後金の明攻撃の助勢をする」の履行を迫られ、彼は衰退した明への過度の肩入れを避けて中立を主張するが、朝廷の大勢は倭乱の際に助勢をしてくれた明への忠誠を主張、結局この政争に敗れ王を追われて済州島に流刑となる。そして主戦派が擁立した仁祖は、明の攻撃助勢を拒否、このため後金が一気呵成に攻め込んで来る。仁祖は都を脱出して篭城するが、完膚なきまでの大敗北を喫する。近年の光海君の評価は、暴君と言うのは捏造で、政争に敗れただけの本当は名君であったとなりつつある。

（ロ）王妃の政治介入（垂簾聴政）

垂簾聴政とは、幼少の王が出席する重臣会議で王の大妃（祖母）や前王妃（母）が王の

背後に簾を垂らして座し、王に成り代って決裁を行う事である。こうした正式な場だけでなく、宮廷内でリモートコントロールをしたケースもあり、第六代の端宗、第九代の成宗、第十代の燕山君、第十三代の明宗、第二十三代の純祖、第二十四代の憲宗、第二十六代の高宗がその例とされる。

そして、この王妃たちと結託した両班たちの党派間の政争が繰り返される。

▲貞純王后

ドラマ「イサン」こと正祖の祖父である英祖の貞純王后について触れておきたい。

彼女は、現在世界遺産である「安東」を本貫とする名族安東金氏の出身で、僅か十四才で六十六才の英祖の後継正妃となる。当時は党派の覇権闘争が最も盛んな時であり、彼女の属する一派は英祖（トンイの息子）の摂政となっていた世子（イサンの実父、後に荘祖を追号）を英祖に讒言をし、英祖はこれを信用してこの世子を米櫃に押し込めて餓死させる。彼女らの一派は、英祖亡き後のイサンの即位にも反対するが、結局イサンが即位することに成功する。正祖は、父親の敵であり且つ政敵であるこの貞純王后を宮殿から追放するが、賜死の処分までは出来ない。彼女は流石に正祖の時代はひっそりと息を潜めるしかなかった。ところが、正祖が死去して彼の遺児（純祖）が幼少で即位するや、実家の勢力を背景として死ぬまで垂簾聴政を行い、正祖の開明政治を全面否定し、正祖の実学尊重から儒教中心主義に復古してしまう。彼女の死後は実家筋の外戚安東金氏の勢道政治となり、亡国の原因となる排外政策を徹底する。

（八）三大悪女

▲張緑水（チャン・ノクス、燕山君の側室）

元々は妓生で、斉明大君の部下との間に一子を設けるが、歌舞演芸に優れていたので燕山君に可愛がられ側室に転じる。燕山君を陰で操り政治権力を手にするも、反対勢力の宮廷革命により燕山君が廃位となり、彼女は斬首刑に処せられる。

▲鄭蘭貞（チョン・ナンジョン、明宗の垂簾聴政を行った文定王后の黒幕）

彼女も元は妓生であり、文定王后の弟の側室になり、更には正室亡き後の正室となる。彼女の義姉である文定王后に可愛がられ、政治の実権者の王后の黒幕として、夫を両班の最高地位の領議政に押し上げ、巨万の富を築かせる。しかし、後ろ盾であった王后の死で地位は瓦解し、夫の前妻殺害の嫌疑で連行される途次自決する。夫も官位を剥奪された上、流刑となり流刑地で自殺する。

▲張禧嬪（チャン・ヒビン、粛宗の側室から王妃になるも、数年後側室に格下げ）

張禧嬪は、「中人」と言う下級役人の子で、粛宗の曽祖母の女官であった。その頃西人を後ろ盾とする仁顕王后には子が生まれないため、世継ぎの問題が大きくなり、曽祖母たちが南人と結託して類稀な美貌の彼女を粛宗の側室に送り込む。そして粛宗の寵愛を受けて世子（後の景宗）を生み、更には仁顕王后を策略により追い出して自らが王后に納まる。これを契機に西人の勢力が一気に凋落、南人の独壇場となり王を蔑ろにするようになる。そこで、粛宗は南人と西人の勢力均衡策として、西人派の前王后を復位させ、彼女は元の嬪に格下げする。これを諒としない彼女は、王后呪詛をしたとされ、王から賜死処分を受ける。粛宗の死後、張禧嬪の遺児である世子（景宗）は即位するも、両派の争いが絶えない中在位四年で病死する。そこで次期王となるのがトンイ即ち崔淑嬪の子の英祖である。英祖は在位五十二年の王朝最長在位を誇る王である。その次なる王が英祖の孫のイサンであり、トンイの血筋が王位を継承して行く。

自由執筆

「湊川だよ」

千坂　精一

歴史物を書いていて、足利尊氏が九州から盛り返してくるのを迎え撃つ楠木正成が都へ誘き入れて新田義貞と挟撃する策略を上奏したが、坊門清忠に反対されて玉砕覚悟で兵庫へ行く場面へきたとき、ふと太平洋戦争末期に最初の体当たり専門部隊の桜花特攻機を装備した神雷部隊指揮官のことを思い出した。

その人は野中五郎という岡山県出身の少佐で、海軍兵学校六十一期、年齢は数え三十五歳で特攻隊指揮官としては最高齢であった。

特攻機に使われた機種は零戦（単座）や九九式、彗星（複座）、銀河（三座）の艦爆が殆どであったが、消耗に生産が追いつかなくなったので窮極の器材として桜花（人間爆弾）や回天（人間魚雷）などが実用化された。

桜花は一二〇〇キロ爆弾で全重量二一四〇キロ、これを山本聯合艦隊司令長官が戦死したときに搭乗していた一式陸攻（七座）に懸吊して出撃し、標的の艦船を発見次第同乗の桜花隊員が移乗して切り放されると翼下と尾部のロケットで推進して標的目掛けて突入してゆくのである。

仮定の話だが、これが飛行機なら搭乗員がその気になれば体当たりせずに帰還できるが、桜花は母機から投下されればその瞬間から生還の可能性はまったくなくなるのだ。

野中少佐はその桜花を懸吊する母機一式陸攻を指揮する海軍航空隊最初の体当たり専門部隊神雷部隊の飛行隊長であった。

少佐といえば零戦の戦闘隊や九九式、彗星、銀河など攻撃隊の飛行長で、司令、副長とともに司令部の首脳であって飛行隊長は大尉級なのであるが、神雷部隊は他の飛行隊とちがって混成飛行隊なので飛行長級の少佐が指揮を執っていたのであろう。

ともあれ、この神雷部隊は終戦前年の二月に茨城県神ノ池基地（神栖市）で開隊されて訓練をつづけていたが、一年後に南九州への進出を命ぜられた。

空襲の被害を避けて一旦鹿屋（鹿児島県鹿屋市）、宇佐（大分県宇佐市）、富高（宮崎県日向市）に分散したが、二月に南九州に点在している残存航空隊を集めて第五航空艦隊が新編制されて鹿屋に司令部をおき、司令長官宇垣纏中将、参謀長横井俊之大佐が着任すると神雷部隊は鹿屋基地に集結するよう命ぜられた。

野中隊長は、母機の一式陸攻十八機を六機編成の三隊に分けて電波探知機装備の指揮官機を除く五機に桜花を懸吊することにした。

三隊それぞれを指揮する分隊長は甲斐弘之大尉（海兵七十期）、西原雅四郎大尉（海兵七十一期）、佐久間洋孝大尉（同期）で、先任の甲斐大尉が総指揮を執ることになった。

野中隊長は岡村司令、五十嵐副長、岩城飛行長の三役と同道して司令部へ出向き、宇垣長官と横井参謀長に到着の挨拶をした。

そのとき、岡村司令が横井参謀長に応援戦闘隊の機数を確認したところ横井参謀長は、二十三機しか調達できなかったと告げた。

これでは神雷部隊の掩護戦闘機三十二機と合わせて五十五機である。

岡村司令も野中隊長も耳を疑った。

一式陸攻は被弾するとすぐ火を噴く欠陥があるので、米軍側では、

「ワン・ショット・ライター」

と揶揄っていたそうである。

全長二十メートルの大型機で八〇〇キロ爆弾を抱いて出撃するのでグラマンの迎撃を受けたら小回りがきかないことから、一機につ

き護衛戦闘機が四機つくことになっていた。攻撃を受けやすい後方上空の左右に二機とさらにその上空に二機である。

神雷部隊の出撃は一式陸攻十八機であるから、護衛戦闘機は七十二機を必要とする。

宇垣長官は昭和十八年四月十八日聯合艦隊参謀長として山本長官と航空部隊激励のため一式陸攻二機に分乗してラバウルから現地に向かう途次にブイン上空で待ち伏せていたジョン・ミッチェル少佐指揮の戦闘機隊P－38十六機に襲われ撃墜された経験があり、このとき護衛戦闘機がたった六機で防衛しきれなかったことを承知しているはずであった。

岡村司令は再三横井参謀長に増数を懇願したが色好い返事が得られなかったので、ついに業を煮やして、

「この護衛機数では悪くすると桜花を投下できても、母機の帰投が危ぶまれる」

そう言って執拗に食い下がった。

岡村司令の懸念ももっともと同情した横井参謀長が、宇垣長官に、

「護衛零戦の機数が足りませんから桜花の出撃はまたの機会にしてはいかがです」

そう取り繕ってくれたのだが、その額の広い赤銅色の顔から〈黄金仮面〉と渾名（あだな）されている宇垣長官に、

「いま桜花を使えないなら使うときはないよ」

そうきっぱり撥ね付けられてしまい、横井参謀長と岡村司令の顔に苦渋が満ちた。

この第五航空艦隊が新編制されたのは、九州方面に展開してもっとも公算の大きい米軍の沖縄上陸作戦に備えるためであった。

しかし、寄せ集めの各航空隊はまだ練成がすすんでいなかったので、このままで作戦に参加することは不可能な状態であった。

そうはいっても米軍の進攻は切迫していて、従来の戦法では成算がなかった。

そこで大本営は、特攻以外に戦法はないと司令長官に親補された宇垣中将に内示した。

宇垣長官も、

（ここは未熟な搭乗員でも成果を期待し得る〈特攻〉に依存するよりほかにない）

ことを考えていたので意見は一致した。

野中はその場で生還できないと覚悟した。

彼は二二六事件の叛乱将校の一人で拳銃自決した野中四郎大尉の実弟だったが、そのことを隠すことなく、初対面の挨拶は、

「国賊の弟でござる」

そうはっきり自己紹介していたという。

背が低く丸坊主の目立たぬ野中だが豪快な親分肌の人で、機種の異なる飛行隊を三隊もつ航空隊はほかに例がなく、それぞれに作戦指導して統率している野中飛行隊長は名指揮官として広く知られていた。

野中隊の戦闘指揮所には〈非理法權天〉と〈南無八幡大菩薩〉の大幟が翻り、「整列」や「掛かれ」の合図は陣太鼓だったという。

出撃当日、護衛戦闘機を充分調達してやれなかった責任を感じてであろう岡村司令が、

「今日は俺が指揮を執る」

そう野中に言ったが、心中を察した野中は、

「司令、そんなに私が信用できませんか」

そう言って二の句を継げさせなかった。

また、先任分隊長の甲斐大尉がこの出撃が死出の旅になるであろうことを予期して、

「今日は私が指揮して征きます」

そう申し出たが、野中は応じなかった。

そして、飛行場まで出撃を見送りにきた岩城飛行長に、

「飛行長、湊川だよ」

そう楠木正成の心中を忖度して寂しく笑い、機上の人となった。

この特攻の結果は、一式陸攻、桜花ともに全滅、零戦十機未帰還で一六〇名戦死という最大の犠牲者を出してしまった。（了）

自由執筆

杜甫の任官

中込　勝則

さきに「史遊会通信」No.202号において、杜甫が長安に上って科挙に応じたが再度下第し、その後仕官の伝てを求めて苦節十年を過ごしたことを書いた。引き続いて杜甫の任官のことを述べる。

懸命の任官運動が実をむすんだのか天宝十四載（七五五）十月、「河西の尉」への任官の沙汰があった。位は従九品下であった。「河西」は今の雲南省昆明の西方で、僻地であるのは勿論、当時は異民族の反復常ない蛮地であった。「尉」は県（＝中国では村）官で、地方行政単位の最下等の役職である。これは、彼が抱いていた「官途について、立ちどころに要路の津に登り、君をして堯・舜の上に致し、再び風俗を淳ならしめん」とする理想には程遠い。彼はこれを拝辞した。

それから間もなくして、こんどは「右衛率府兵曹」への任官の知らせがあった。この職は名前こそいかめしいが、長安に駐屯する近衛軍の武器庫の管理係で、位階は従八品下である。先の「河西の尉」より二段階上ではあったが、低位の官であることには変わりはない。しかし、今度は拒まなかった。彼はすでに四十四歳になっていて家族の生活のことを考えればあれこれ選んでいる余裕はなく、長安にいられるだけでもましである。下っ端役人でも拝受せざるを得なかった。

このころ作った『官定まりて後、戯れに（自分に）贈る』という詩の中で、「ぶらりと過ごしつつ酒にふけるには少しばかりの禄を頂戴したいと思ったからだ」と自嘲気味にいっている。

一応の職の安定を得たので、前年に食のために家族を長安から百二十キロ東北方にある奉先県へ疎開させていたのだが、同十一月これを迎えに旅立った。ところがその直後、安祿山の乱が勃発した。

彼は家族を連れ戻すどころではなくなって奉先県よりさらに北の鄜州（ふしゅう）の羌村（きょうそん）というところに避難させた。

玄宗の後を襲った粛宗が霊武（寧夏省内、内蒙古に近い北辺の町）で天保十五載（七五六）七月に即位し（年号は至徳元年と替わった）、そこに行在所をおいたと知った彼は、鄜州から霊武に向かおうとした。霊武は現在の寧夏回族自治区にあって、内蒙古に近い北辺の町である。

鄜州から霊武まで行くには、鄜州から北へ靖辺まで二百五十キロ、靖辺から西へ霊武まで二百五十キロある。この長い距離をひとり徒歩で向かおうというのは、並大抵の覚悟がなくては出来ない。彼生来の生真面目さで、官吏の本分をまっとうしようとする意気込みはすざましいものがある。ところが途中賊軍に捕まって長安に連れ戻され軟禁されてしまう。この最中に『月夜』『春望』『江頭に哀しむ』などの名作が生れた。

やがて彼は、官軍が賊軍を圧迫して行在所も長安から西へ百五十キロの鳳翔に移ってきたことを聞き、軟禁より約二年後の至徳二載二月、長安を脱出して鳳翔へむかった。今度は賊軍に捕まらないように間道を行き、様々の苦難の末やっと行在所にたどりつき、その功によって従八品下左拾遺の職を授けられた。位は前と同じで低いが、天子の傍にいて天子の政道を正し諫言する役目で、平時なら進士科に登第したエリートのみが就ける職である。杜甫のように合格もしていない者が就くのは異例である。「天子をして堯舜の上に致す」という彼の理想実現に一歩近づくわけで、彼

は、主恩に感激してこれを拝受した。

ここまではめでたしであったが、同年五月、宰相房琯（ぼうかん）の事件が起こった。杜甫は、予てから房琯とは、詩の仲間であり、お互いに認め合った友人だった。房琯は、安祿山の乱の際に宰相の責任上、これを防ぐため官軍を率いて出たが文官の身の悲しさ、陳濤斜に敗れたりした。しかし、粛宗が帝位についたときに玄宗から託された譲位の知らせと宝物を粛宗にもたらした大功によって宰相の職にあった。彼は普段から琴や鼓を好んだ。この趣味からおのれの食客に琴の名手董廷蘭（とうていらん）を召抱えていたが、この男が賄賂をとっていたことが発覚。これは房琯が自分で賄賂をとってはまずいので董廷蘭に代行させていたのだと、反対派から讒訴されたのである。

この事件の裏には、宮廷内の派閥闘争がからんでいた。すなわち、郭子儀や李光弼らの奮戦によって賊軍を長安・洛陽から追って朝廷の社稷が回復されるや、霊武・鳳翔以来登用された一派と旧朝廷派との間で暗闘がはじまった。房琯は旧朝廷派だったから、反対派に狙われたのである。そして彼は宰相を罷免された。

これをみた杜甫は、左拾遺という政治向きに誤りがあった場合天子に諫言する職責から、房琯を弁護した。「彼の罪は些細で、大功ある者を罷免するのはよろしくありません」と。帝は怒って、三司に彼を尋問させた。あたかも李陵を弁護した司馬遷に似ている。そのとき杜甫を弁護してくれたのが、宰相張鎬で、「杜甫がもし罪あるというのであれば、今後、口を開いて言う者はなくなるでありましょう」と。これによって杜甫は罪に問われることは免れたが、以後天子の覚えはめでたからず、遠ざけられるようになった。彼は多少暇になったので、許しを得て鄜州に置きっぱなしして心配になっていた家族を迎えに行った。

このときのことを詠んだ長詩『北征』は、杜詩の最高傑作といわれる。

鄜州から長安に戻った彼は左拾遺の職に復し、生真面目に職に励んだ。しかし、帝には目をかけられることもなく、世渡り下手が災いして同僚との折り合いもうまく行かず、次第に酒におぼれるようになり、役人服を質に置いて退勤の途中に、曲江あたりをうろついては酔を尽すようになった。自身「酒債は、尋常到る処にあり」と詠う有様だった。

やがて、房琯は陝西省の邠州刺史に左遷され、同時に杜甫もこれまでの関係から房琯一派と看做されて、長安の東に在る華州の司功参軍に追われた。

この職は、従七品下で、地方官吏の係長クラス、様々な雑務がおおく、おりしも夏の暑さとあいまって彼を苦しめた。

このころから彼は官吏の地位を辞する覚悟を固めていった。故郷洛陽を訪れた際に見聞きした庶民の苦しむ姿を『三吏三別』の詩に詠んだのもこの頃で、いまの職位では己の「風俗をして淳ならしめん」との理想の実現には程遠いこともこの思いを助長した。

おりしも関中地方は飢饉に見舞われて生活も苦しく、乾元二年（七五九）七月、彼はやっと得た官を捨てて、家族の食のために甥を頼って、甘粛省秦州に流れていった。

彼があれほど希求した官位にあったのはわずか二年余であった。